

瓦^が谷^{こく}山^{さん}だより



vol.7

ご挨拶

まちどおしい花の季節、田んぼの季節がまもなくやってきます。

真光寺には約二百五十本の桜の木を植えています。植えたばかりですから、花を楽しむというところまではいきませんが、年々の成長が楽しみです。昨冬大きな桜の木を植えたときに、植木屋さんから聞いたのですが、「しだれ桜」は剪定するだけではなかなか上へと上っていかないそうです。そこで支柱を立ててしだれている枝を、無理やり天を向かせて固定するそうです。そうすると数年でその枝がやる気になって、上へと伸びていくそうです。この話を聞いて、宗教と人間の関係について考えました。人間には欲望があつて、欲の強弱によって、右へ左へと揺らめいています。夢や希望に向かつてのびのびと一直線に生きていくことは難しいことです。そうした生き様に添え木をする役割を担うのは、親であつたり、友であつたり、神仏であつたり、宗教だつたりするのだらうと思うのです。亡くなった方を仏と呼ぶのは、亡くなった方の生き様が後世の指針となり、添え木となるからではないかと思ひます。まっすぐに伸びるべき木が横へ広がると、その枝は折れてしまひます。最悪の場合は木そのものが枯れてしまひます。自殺や人殺しが増えている世相を見ると、人の生き方がどうも横にそれているような印象を否めません。

世間は欲ぼけの様相です。欲により親、子、友人、同僚まで殺される世の中になりました。死にたいという欲は自らの命をも殺してしまひます。今こそまっすぐな添え木を持たなければなりません。また、いずれ枯れはて死ぬにしても、できれば後世の人の添え木と

なれるよう、まっすぐに枯れたいものです。お彼岸は特別な修行期間です。先祖を通して自らの命を見つめる時です。西方の彼岸に思いをいたしながら、自らの足元を点検して下さい。

新伽藍の完成は五月まで伸びそうです。建設会社倒産の余波は今も収まらず、大小の試練の連続です。東長寺よりご寄進いただく本堂は「慈嶽堂」と名づけ、諸整備も合わせて平成二十一年九月の完成を目指すことになりました。樹木葬墓地は昨秋読売新聞夕刊トップに取り上げられ、今なお記事を見た方の来訪が絶えません。里山再生活動では、昨年の活動をさらに広げて、生態系の保全のために努力していききたいと思ひます。千葉県では自治体と企業と民間活動団体が共同で開発と環境保全を行う、持続可能な環境保全モデルを作る計画があるそうです。できることならこうした計画に協力し、地域の皆様と話し合いながら、地域活性化を進めていければよいなとも考えております。また浅間山をきれいにして、後世に里山を残す計画も進めていきたいと考えています。城跡の土塁やスタジイの巨木などもあり、お年寄りの話に聞く、桜の咲く美しい浅間山になればいいなと夢見ています。真光寺山と浅間山が桜に覆われれば、地域の名物ができるかもしれません。皆様のご理解とご協力をお願い致します。

合掌

住職 岡本和幸



開創四百五十年記念事業

◆伽藍建立工事の現状報告◆

平成二十年一月六日、上棟式を執り行いました。宮大工の伊藤棟梁を筆頭に大工さん、檀家役員、設計関係者、主な業者においで頂きました。

当日は雲一つ無い快晴に恵まれ、仏殿の屋根に取り付けられた棟飾り（五龍帝人）の五色の幕が美しく風にたなびいていました。

槌打の儀では安全や繁栄を願う掛け声と共に、二組に分かれた大工さんが棟木を棟に打ちつけました。



■棟打ちの儀



■拡張工事が進む土取り場



■2月3日の大雪で雪化粧した伽藍



■伐採される樹木

◆里山葬墓苑◆

「失うもの、生まれるもの、」

真光寺の前の道、新田の奥へと進むと約1kmの間に3箇所土取り場がある。内1箇所は土取り作業が終了し山とその会社は消失した。残ったものは山肌が剥き出しとなった急勾配の法面と不法投棄されたゴミだけ。

そして今、一番奥の土取り場では拡張工事が進んでいる。この2ヶ月の間で、何ヘクタールという規模で立木が切り倒され森が消失した。間もなく山も無くなってしまうだろう。行き場所は羽田空港。滑走路の拡張工事で3千万立米（10tダンプ約568万台分）の土が必要とされている。

「種が減びる」ことはいけないことなのだろうか？

03年、日本の朱鷺が絶滅したというニュースは悲しい話として伝えられた。同様に、恐竜やマンモスなど、地球環境の変化に対応できずに滅んだ生物はたくさんいる。また、進化という変化を伴い生き続けている生物もたくさんいる。生物が、変化する地球環境へ対応して進化する、または絶滅するのには気の遠くなるような年月が必要で、簡単に滅んでしまうような種はそもそも誕生しないのではないだろうか。恐竜が生息していたのが、三疊紀から白亜紀の約1億9千万年間、マンモスで約5百万年間、人類は約6百万年間であるからだ。

だが、近年における地球環境の変化はどうだろうか、18世紀後半にイギリスで始まった産業革命から約250年程度しか経っていないのに、温暖化現象は海水の温度を0.75℃上昇させ北極の海水面積を激減させているし、気候変動が異常だと言うことが実感としても感じ取れるようになってきた。

生物が持っている自己防衛力・適応能力は地球環境の変化のスピードについていけず、進化を遂げる前に絶滅する（している）のではないだろうか・・・。

里山葬墓苑に木々を植樹していると、森を育てている様に思えます。それは一世代で出来上がる訳でもなく、全てを作り上げることも出来ません。ほんの少しの「きつかけ」と、自然が自然と森と成っていくのと歩調を合わせ共生し見守る（管理する）だけだと思います。ドングリから新しい芽が出ました。飛来する鳥の数も増えました。後は長い年月が必要です。

小さな集落の中で、山が消えようとしています。また、森が生まれようとしています。

真光寺の前の道を何十台（延べ台数にすると百台/日以上かもしれません）というダンプトラックが山砂を採取するために往來しています。日々山が削り取られていく光景を目の当たりにすると、取り返しが付かない何かが無くなっていく感覚に襲われます。

（文責 山崎康弘）

行事報告

◆修正会法要◆ しゅしょうえ

一月三日に修正会法要が行われました。修正会とは一年の始まりに、いま一度我が身を振り返り自らを修正し、新たな年の決意をする年頭の法要です。

◆七日法要◆

一月六日に縁の会七日法要・修正会が行われました。参加者の方と共にお雑煮をいただき、ゆっくりとしたお正月を過ごしました。

番外編

◆職業体験◆

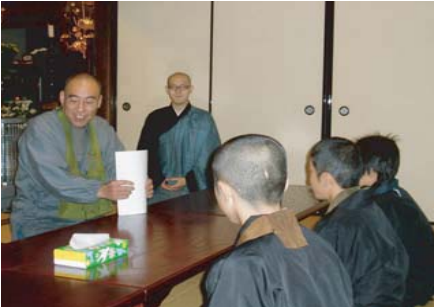
昨年の十一月二十七・二十九日の三日間、平岡中学校の生徒さん三人が真光寺に職業体験でやってきました。東京のお寺からの助っ人である土屋師に、坐禅、写経、料理、掃除などの指導してもらいました。修行僧さんからの（？）この三日間が、僅かでも彼等の成長の糧になれることを願っています。



■職業体験 坐禅



■職業体験 読経



■職業体験 住職の話



■七日法要

里山再生活動

◇活動のこれまで◇

里山再生活動のお米づくりも五年目に入りました。年を経る毎に耕作面積も活動に参加する人も増え、半ば勢いで始まったこの活動ですが、これからという方向で進めていくのかを改めて見直す時がやってきたようにも感じます。

この活動が始まった事の発端は平成十四年、真光寺四百五十周年記念事業計画策定中に、大月川上流部一帯の希少性（川の源流域が開発の手に触れていない）を動植物の専門家より指摘されたことに起ります。「それなら手を入れて田んぼでもやってみるか！」。翌年武蔵工業大学吉崎研究室の人々と共に、荒れていた谷津田の開墾に着手し、以来毎月イベントを開催し今に至るといふ訳です。

最初の二年間は一本の谷津を少しずつ開墾してお米を作っていました。一昨年には、隣の谷津でお米を作っていた地元の方が他の田を耕すということで、その田んぼを真光寺で引き継ぐ事になり、耕作面積が突然二倍（七反五畝）！に増えました。

ここに至るまでは多くの方々のご協力がありました。地元の檀家さんはもちろんのこと、アフリカ・マリ共和国に木を植える活動を推進する「サヘルの森」の方々、及び中国ホルチン砂漠に木を植える活動を推進する「緑化ネットワーク」の方々にはアドバイス、実践画面において幅広くご支援を受けています。又、両団体会員の国内活動地として当山がその受け皿ともなっています。

二〇〇六年、（株）ティンバーランドの環境デーボランティアを受け入れ、年二回約二百名の研修地として協力しました。三月・十月に行われる各月一度の田植え、稲刈りなどの行事には毎回約二十人弱の老若男女が都市部から参加し、田んぼに入ってお米作りを体験しています。

耕作年数	耕作面積	米収穫量
2004年（1年目）	8畝（約800m ² ）	200kg
2005年（2年目）	2反（約2,000m ² ）	660kg
2006年（3年目）	4反（約4,000m ² ）	1,140kg
2007年（4年目）	7反5畝（約7,500m ² ）	2,130kg

◇ 谷津田の今 ◇

私達がお米を作っている谷津田がある大月川上流部の一帯（約六十ヘクタール＝約六十万平方メートル）には七本の谷津があり、水田、湿地、里山（森林）がモザイク状に入り組んでいます。この一帯でお米を作っているのは私達の他には一名しかいません。山を利用・管理しているのは人工林地で一名、その他利用者がいないのが現状です。人手の入らなくなった山、水田が広がっています。そして周辺には土砂採取場が迫り、谷津田に面した山は既に業者に売り払われています。また数箇所で残土の埋め立が行われていますので、このまま豊かな環境を維持することは絶望的といわざるを得ません。

◇ これから ◇

●大月川源流が持つ谷の全ての保全回復

それぞれの谷からの水の量が増える事により、本流の水量が劇的に増えそれとともに生態系も劇的に回復する↓里山全体の生態系も回復する

●山の整備

鬱蒼とした針葉樹の手入れ、落葉樹林を増やす↓林床に陽が入る↓多様な植物が増える↓山の貯水・浄水機能の復元

●無農薬・有機栽培の実践

生き物と共に育つお米づくり・できるだけ周囲にあるものを使う

●体験の場として

身近な自然に手を入れ、自然の恵みを受けながら自然と共に暮らしていた時代の人々の知恵や在り方を体験する場として↓各自の生き方の参考にしてもらいたい

◇ 方丈の夢 ◇

子供たちが自然を体験し学ぶ場であり、同時に大人が引き起こしている残土埋立地がどのような問題を起すのか、さらには土取り跡地がどのような自然回復していくかなど、環境と開発の問題を考える場所となる事を夢見ている。そのような場所で老人ホームや子供の教育機関などが共生し、それを維持する活動を展開できれば素晴らしいと思うが、幾分夢が大きすぎる。



■梁の整備前 左手 笹やクズで生える梁



■2004年5月 奥の谷の開墾前

⋮

⋮



■梁を整備中の上田さん



■梁の整備後 谷津の陽当たりと風通しが良くなります



■2007年5月 奥の谷の開墾後
今では8枚の田んぼが続いています

◇ 2008年 里山再生活動 年間スケジュール ◇

“里山づくり”と題して山や雑木林、田んぼや水、そしてそこを行き交う動植物全体の事を意識しながら、里山を体験できる場にしたいと思っています。もちろんすぐには本格的に何かできるわけではありません。私達も常に模索中です。参加者の皆さんと共に進んで行ければと思っています。

日 程	田 ん ぼ 仕 事	里 山 づ く り※
3月15(土)・16(日)	開墾	七つの谷を巡る/植生調査
4月19(土)・20(日)	代掻き/黒塗り	生物調査/植生調査/プラン立て
5月24(土)・25(日)	田植え	生物調査/
6月28(土)・29(日)	草取り/ホタル狩り	生物調査
7月19(土)・20(日)	草取り/ホタル狩り	生物調査
8月	休み	休み
9月13(土)・14(日)	稲刈り	生物調査
10月18(土)・19(日)	収穫祭	生物調査/植生調査
11月～翌年2月※	休み	間伐/枝打ち

※ “里山づくり”の内容はその時の状態や進み具合によって変更する可能性があります

※ 11月～翌2月の”里山づくり”の具体的なスケジュールは次号の寺報にてお知らせします

『代掻き・黒塗り』 日時 4月19日(土)・20日(日) 内容 代掻き・黒塗り及び田圃の整備など

集合場所・時間 真光寺・10時 *電車での参加の方には送迎を致します。

(要申込み・内房線姉ヶ崎駅改札口午前9時30分集合)

費用 1泊2日 6千円(保険代・食費含む) 特典 参加回数当たり2キログラムの新米を差し上げます

服装 動きやすく、汚れても良い服装

申込み方法 satoyama@shinko-ji.jp 又は FAX 0438-75-7630 までお申込み下さい

尚、参加申込みは4月14日(月)〆切とさせていただきます



■ノスリ 猛禽類
一年中ほぼ同じ
地域にすむ留鳥



■ヤゴ トンボの幼虫であるヤゴは水中に生息する水生昆虫

■イトトンボの連結産卵



■12月の谷津田 一年を通して様々な色に彩られます



道元禪師「学道用心集」に学ぶ

真光寺住職

岡本 和幸

永平寺を開かれた道元禪師は、膨大な書物を書き残しています。その中に「学道用心集」という書物があります。これは、仏の道を学ぼうとする者の心得のような書物であり、道元禪師の宗教が如実に現れている書物でもあります。

学童は学びの道と書きます。人はなぜ学ばなければならぬのでしょうか。人として生まれ、いずれ死なねばならぬ以上、少しでも充実した有意義な楽しい人生を送りたいと願うのは当然の事でしょう。学びの道はすべて、人間としての充足した日送りのための道といえます。「学道用心集」はその心がけを説かれた物です。

前号に引き続き、「学道用心集」の中の道元禪師の言葉をひきながら、私達の生活に生かしたお話をいたしましょう。

実践の中にこそさとりがある

道元禪師さまのお示しになった『学道用心集』は、禅の修行をするにあたっての心得を十章に分けて解説した書物です。これをひもときながら私たちの生活に照らした教訓を得たいと思います。

有るが云く、一念三千の観解なり、有るが云く、一念不正の法門なり、有るが云く、入仏界の心なりと。かくの如きの輩は、未だ菩提心を知らず。（『学道用心集』一）

道元禪師がご在世になった鎌倉時代は、現代に伝わる仏教の各宗派がほぼ出そろった時代であることからわかるように、仏教をめぐって様々な理論が交わされていました。しかし、それは名聞にとらわれた高僧学僧による戯論（空虚な理論）で、およそ本来の仏教の精神からかけ離れたものになっていました。道元禪師は、そうした当時の仏教界の風潮をこのように批判されています。さとのりの世界のついて、ある人は「一念三千の観解」と言い、またある人は「一念不生の法門」と説き、また別の人は「入仏界の心」と言っている。しかしこうした学者達は、さとのりの境界をただ知識として知っているだけで、仏になろうと願いはげむ心を知らない。それは絵に描いた餅であり、自分で行じなければ何の意味もないものになってしまふ。そして、

行ずれば乃ち証その中に在りと。行ぜずして証を得る者を聞くことを得ず。（『学道用心集』三）

と、お示しになりました。これはどういう意味かといいますと、実践修行の中にさとりがあるのであって、実践しないですとさとりを体得した人など聞いたことがないということです。このように、道元禪師は「証（さとり）」は「行（実践）」なくしてはあり得ないことを、多くの著書の中で再三にわたり説かれています。また、いたずらに知識や先入観を持っていると、自分の解釈に会うものしか認めようとしないから、真実の法に出会ってもそれを受け入れることは難しいとおっしゃっています（同書・五）。このように、道元禪師は実践が伴わない頭の中だけの仏教を、かたく戒めていらっしやるのです。

大量情報時代への警鐘

現代に目を転じてみると、昨今は膨大な量の情報が氾濫し、時代は情報化社会などといわれ、インターネットなどによるコミュニケーションや、さまざまなシミュレーションが生活の中にどんどん入ってきます。実際に物や体を動かさずとも、机上で疑似体験ができたり、大量の情報が得られるのはたしかに便利この上ないことですが、一方で危惧しなければいけないのは、瞬時に頭の中だけでものごとを判断する傾向が強まっていることです。

頭の中で考えた世界は、頭の中だけで完結しています。しかしながら、実際にはこの身は外の世界のさまざまな条件が時間をかけてととのうことによつて成り立っています。そのことを無視して自分の頭の中ばかりが先行するような状態が続いていると、やがてはストレスを生じて心と体のバランスを崩してしまふことになります。

道元禪師は「自分の心の中に迷いやとらわれの心がおこったときには、静かに座って自分自身を観察せよ」と言われます。この身体はどのようにして成り立っているのか、そして私はどのように生かされているだろうかということを、静かに座って観察せよと言うのです。そうすると、みずからのあるべき姿が見えてきます。そのように本来の自己のあり方に立ち戻ってみることこそが、私どもが幸せな人生を歩んでいく唯一の方法であると、道元禪師さまはお示しなのです。

「行」と「証」との相互作用ということでは、行の招く所は証なり、自家の宝蔵、外従り来らず。証の使う所は行なり。（『学道用心集』三）

という明快なお示しがあります。つまりさとりはみずからの実践によってもたらされるものであって、自分の宝物は外から突然に得られるようなものではない。そして実践もまた、みずからのさとりによって引き起こされるものであるという意味です。

かつてオウム真理教は、空中浮遊という超能力で人々をひきつけました。アニメの世界などでも子供たちをひきつけてやまない超能力ですが、大人でも奇跡的に難病が治癒したなどという宣伝文句にひかれて宗教に入信したりします。特に心の疲弊した状態では、こうした奇跡に心を動かされてしまいがちです。しかし超能力や奇跡は外に求められるのではなく、すべての行いは自分の中にある宝の蔵から出てくるものであるということ、このお言葉から学び取りたいと思います。

迷いの中に立を立てる

お釈迦様は、「我は業論者である」と言われました。「業」というと、「宿業」とか「悪業」といった言葉が連想されるように、今ではこの言葉はあまり良いとらえ方をされていないようです。しかし、仏教本来の「業」の意味するところは、単に自分自身の行いです。お釈迦さまは、人間にとつて最も大切なことは、自分自身の行いであるということをお示しされたのです。

「業」には「他業」と「自業」があります。「他業」というのは私たち一人一人が生まれる前から積み重ねられてきた、いわば社会の「業」です。それに対し、「自業」というのは自らの行いの積み重ねです。「他業」は自分の力では変える事ができない場合もありますが、「自業」は「自

業自得」という言葉があるように、自分の考え次第で大きく変わっていく可能性があるので。良い行いであっても、悪い行いであっても、自分の行為はすべて自分の積み重ねとなっていくのです。

識るべし行を迷中に立て証を覚前に獲ることを。

(『学道用心集』三)

誰しも確信を持って行動を起こすことは難しいものです。しかし迷いの中にあっても、先達古人のありさまに学び、それを真似て行っていくことで、知らず知らずのうちに自然に良い行いが積み重ねられていくものであるというお示しです。

私も僧侶が世間の自由な暮らしを離れて本山に修行に上がるときは、実を申し上げますと、非常に消極的な気持ちで上がる人が多いのです。しかし三ヶ月もたつと、仏祖の道場でのしえの時代から伝えられてきた修行をそのまま行える有り難さに涙するようになります。資格を取るためであるとか、親が行けと言うからとか、迷いの中の修行であっても、ともかく行いを立てることが肝心なのです。

頭の中だけの理解や知識ではなく、実際の行いを自分の宝の蔵に積み重ねていく。迷いの中では静かに立ち止まって振り返る。そしてまた行いを積み重ねていく。道元禪師は行いの大切さをここまで突き詰めてお示し下さっています。

日常の中の仏教

醍醐味 くだいごみ

現在では「神髄」や「最上」という意味で使われている『醍醐味』という言葉。一体どのような由来があるのでしょいか？

仏教の大乗経典『涅槃經』ではさとり（敬称）の最高のさとりを醍醐と呼んでいます。牛乳を精製してできる五種の味を五味【乳↓酪↓生酥↓熟酥↓醍醐】といい、最後にできる最高の品である醍醐に最高のさとりを喩えています。（これを五味相生の譬という）

中国の農書（五ノ六世紀）の記述から推類すると酪は酸乳系のもので、酥は牛乳を加熱して煮詰めて凝縮したもの、醍醐はバターかバターオイルではないかとされています。

インドより中国、中国より日本へ伝来し、十世紀頃の日本でも作られていましたが、現在では双方ともに製造方法が断たれており幻の食品となっています。ちなみに、【熟酥】をサンスクリット語でśarpisサルピスといい、カルピスの語源にもなっています。

※サンスクリット語（古代インドの文語）は梵語ともいい、その文字を梵字といいます。梵字はよく塔婆や墓石に刻んである何やら暗号のような文字です。

行事予定

〔檀信徒〕

●春季彼岸会法要 しゅんきびがんえほうよう

平成二十年三月二十三日（日）午後二時より

太陽が正確に西方極楽浄土を指し示す季節、先祖を偲び合わせて自らの生き方と思う時です。ご参詣をお待ちいたします。
法要後は落語（三遊亭時松さん）を予定しています。

●花祭り法要・檀信徒総会

平成二十年四月十三日（日）午前十一時より（台所当番・表場上手）

お釈迦様のご誕生、花祭りを祝い又、檀信徒総会を開催致します。終わって親睦会を開催致します。川原井地区の檀信徒の皆様は送迎致します。役員が出欠を取りますのでお申し込み下さい。また近在の皆様もお申し込みいただければ送迎いたします。電話にてお申し込み下さい。

●婦人会ご詠歌練習日

三月十一日（火）・二十五日（火）

四月八日（火）・二十二日（火）

五月十三日（火）・二十七日（火）

六月十日（火）・二十四日（火）

七月 八日（火）・二十二日（火）

※各回、三月は午後七時半より、五月から午後八時より真光寺本堂にて行います。（どなたでも飛び込みで参加できます）

●お寺掃除

五月十一日（日）表場下

七月 六日（日）新田

八月 三日（日）その他

〔縁の会会員〕

●七日法要 季節の行事予定

〔植樹祭・花祭り法要〕

平成二十年四月六日（日）

【午前】授戒式・四月月供養

【午後】植樹祭

〔田植え祭り〕

平成二十年五月七日（水）

【午前】授戒式・五月月供養

【午後】田植えと里山散策

〔中元祭り〕

平成二十年六月七日（土）

【午前】授戒式・六月月供養

【午後】大そうじ（草取りなど）

〔大施食会法要〕
だいせじきえほうよう

平成二十年七月七日（月）

【午前】授戒式・七月月供養

【午後】施食法要

〔お盆法要〕

平成二十年八月七日（木）

【午前】授戒式・八月月供養

【午後】お盆供養・新盆施食法要

*昼食準備の都合上ご出席いただく場合は必ずお電話又はメールにてご予約ください。午後のみの参加もできます。

*電車での参加の方には送迎を致します。

（要申込み・内房線姉ヶ崎駅改札口 午前一〇時集合）
申込み先 TEL 0438-75-7365 enokai@shinko-ji.jp



お寺ブログ

【瓦谷山だより】

<http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/>

※写真は真光寺最寄り駅「馬立」（小湊鉄道）の踏切にたたずむ信号機